

田中利行

人生の経験を生かし、
これからい。



この記事は14歳の挑戦の二環として大谷中学校の生徒が取材をして、記事を書きました。

14歳の挑戦3日目。今日で紹介するのは小矢部市岩尾滝に住んでいる元地域おこし協力隊の田中さんです。

田中さんの家の中に入ると田中さんが手作りでされたという木材で作られたテーブルや椅子などがたくさんあります。一つ一つの作品が美しく、丁寧に作られていたのでも感動し、思わず見とれてしまいました。

田中さんの職業から聞いてみました。

「主な仕事は、木の伐採をしています。今の日本は機械に頼ってばかりです。機械が入れないところは木が伐採されないのので、私は手作業で行っています。」

「まきやテーブルを作ったりして、全ての木を大事に使う仕事でもあります。台風などで倒された木をみんなはゴミだと言うけれど、私にとって木は自然の宝です。」

「作品は頭の中でイメージして、自分一人で作ります。世界に二つとない作品になります。」
お客さんの要望があれば、いつでもどこでも仕事をするそうです。損得を考えずに行動に移すことが大切だと言っておられました。



田中さんは10年、20年後の自分を持って動いている人が好きだそうです。そういう人は、社会の流れに翻弄されず、ぶれない動きができる人とおっしゃっていました。そういう人は、死ぬまで夢を持つことができ、苦しいことがあっても楽しむことができるそうです。

私たちがその話を聞き、今苦しいことがあっても、その苦しみを楽しいと思えることができ、いろいろなことに挑戦できる人になりたいと思います。今の仕事をされる前は、ニュージーランドでホテルマンや、雪山でのレスキュー隊など幅広い活動をしておられたそうです。

「かつて、ニュージーランドで雪山のレスキュー隊だったとき生死を分ける仕事がたくさんありました。雪山で雪崩に3回巻き込まれたこともあり。そのうち2回は自分のミスで雪崩に巻き込まれました。雪崩を想定したトレーニングしていたから無事でした。」

あらゆることを想定して、日頃から臨機応変に対応できるようにしておられたそうなので、凄いなと思いました。

休日であっても、仕事に必要なトレーニングを今もしておられる田中さん。私たちはトレーニングと聞くと、つらいとか苦しいといった思いが出てきますが、田中さんは「トレーニングをしているときは心がおどっていますね。」と楽しそうに語っておられました。

中学の時の部活は何だったのか質問してみました。

「小学校からアイスホッケー一筋でした。始めたキッカケは不順だったのですが、小さい頃、弟がいつも自分の後についてくるのが嫌で、弟が来ない場所に行きたかったんです。アイスホッケー場だけは来なくてね。そこからアイスホッケーは、24年間続けました。」

「レギュラーになりたかったけれど、20歳前までなれなかった。レギュラーになれたのは自分のチーム内での役割、攻勢のときは最後のシュートまでお膳立てし、劣勢のときはコートをかき回すポジションだと気づけたから。どんなに自分でゴールを決められそうでも、ラストパスを出す。よりゴールが確実になるし、それが自分の役割だとわかっていいたからね。」

「勉強も疑問に思っただけ、勉強しがいがある。疑問に思わないこと、人から言われただけとは勉強しても実にならない。疑問に思ったときに、勉強できるチャンス。」

熱いメッセージをいただきました。その言葉を胸に、疑問に思ったらすぐに行動しようと思いました。

「もしこの先、相談したいことが出てきたらいつでも来て。」
最後にそう言うていただきました。田中さん。本当にありがとうございました。どうございました。

■田中 利行

1948年3月3日生まれ 65歳
富山県小矢部市岩尾滝604